

大豆情報 No. 1

令和5年(2023年)6月26日
東近江農業農村振興事務所農産普及課
(東近江農業普及指導センター)

適期・適切な播種が実施出来るよう準備しましょう！

6月上旬の梅雨入りから降雨が続いており、滞水しているほ場が多く見られます。作業が遅れていても、無理に作業を進めようとせず、排水対策を実施し、丁寧なほ場準備を心掛けましょう。

排水対策

土壌水分が高い状態で無理に播種を行うと、発芽不良につながります。麦作前に施工した排水溝に、麦わらや土塊などが詰まっていないか確認し、ほ場に水が溜まらないよう排水を促しましょう。

また、弾丸暗きよなどの補助暗きよを施工し、溝（明きよ）とつなぐことで、さらに排水性が向上します。



麦収穫後に滞水しているほ場

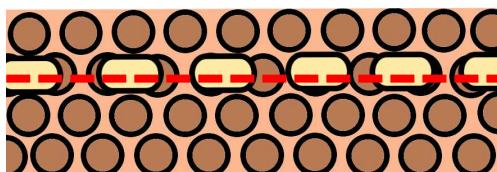


弾丸暗きよの施工の様子

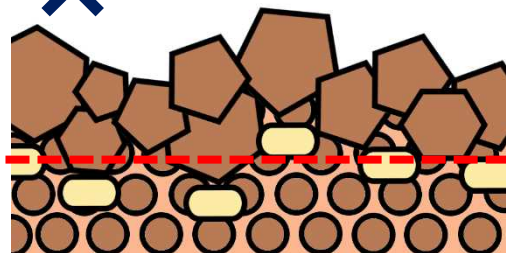
耕起作業

耕起作業は、大豆の出芽・苗立ちを確保する上で重要な工程です。耕起作業が不十分で、碎土率が悪い（大きな土塊が多い）と出芽・苗立ち不良や除草剤の効果が不安定となります。

2cm以下の土塊が7割以上を目標に耕起作業を行いましょう！



土塊が細かく碎土されたほ場



碎土率が悪く大きな土塊が残ったほ場

播種作業

- 大豆は湿害に弱いため、播種後2～3日以内に激しい降雨が予測される場合は、播種を行わないようにしましょう。
- 種子消毒を行い、安定した出芽と苗立ちの確保に努めましょう。
- 播種深度は3cmを基本とし、ほ場条件にあわせて播種しましょう。
播種時の土壌水分が高い場合、播種後に雨が予測される場合
⇒湿害対策としてやや浅め（2cm程度）に播種
播種時の土壌水分が低い場合、播種後に晴天が続くと予測される場合
⇒干ばつ対策としてやや深く（5～6cm程度）に播種
※播種作業中は、播種量や播種深度をこまめに確認しながら作業しましょう。
- 基肥・追肥の施用は、大豆の収量・品質の向上が期待出来ます。

	基肥	追肥
施用量	窒素成分で2～3kg/10a (出芽後の初期生育を確保)	窒素成分で2～4kg/10a (開花期以降の窒素吸収量が多くなるため、増収効果は高い)

※必要以上の施用は、根粒菌の働きを阻害するため注意しましょう。

雑草対策

近年、ホオズキ類やアサガオ類、アメリカセンダングサなどの雑草の多いほ場が見られます。耕起だけでは、雑草を十分に抑えることができないので、耕起前の非選択性除草剤、播種後の土壌処理剤やその後の茎葉処理剤を組み合わせた「体系処理技術」によって、生育後期まで雑草の発生を抑制することが期待出来ます。

草種に応じた除草剤を選定し、適期に除草剤を散布しましょう！

○体系処理の例

